

近代を超える自得する経験：試論

—二宮金次郎の丹精な生活作り—

客員研究員 萩原 富夫

1. はじめに

本試論は、2012年4月から2015年3月までの3年間、本学国際経営研究所内、「近代社会の成立」研究プロジェクトに参加して、自らの問題として取り組むことになった「近代社会」と「二宮金次郎の経験の世界」についての研究報告として作成されたものである。このプロジェクトは、それぞれ異なる研究テーマを持つ3人で構成されている。一月に一度開催される研究会では、近代社会を対象とした3人に共通した内容をもつ文献を選択し、それを読み進めた。その関係もあって、本試論は「近代社会の成立」という研究会が探求することになったテーマから近代に当て嵌まるとされる問題を取り上げたこと、また、それとの関係で自の固有のテーマを改めて考察する少し欲張った内容になった。

前者については、近代社会に関わる問題としては、近代社会の中から生まれてきた「現象学」について学んだ。といのは近代を対象として書かれた文献を読んでいると、その論述を構成している著者の問題への接近には多々「存在論」的な視点が感じられ、その理解の必要性を強くもつようになった。また、筆者は、2009年4月から2011年3月の2年間、本学経営学部大学院修士課程で学んだ。その過程で、自らの「存在」について問い始めた時、“経験の意味”を一度確りと考えてみなければならぬと思った。そのため、それを考えることに向かって、「経験」とその構成が存在論に関わることから現象学を学び、その理解を助けてくれそうな文献を何点か読んでみた。ここでは理解できた限りで近代との関わりから経験について考えている。

後者については、大学院の折に参加した研究会で偶然に知ることになった二宮金次郎の足跡、すなわち金次郎自身経験から見えている世界が研究会で

の話の内容から近代を超えた存在把握ではないかと思われた。その後、自らも伝記などを読んでみると金次郎の経験は正に存在論的ではないか、と思うようになった。そのため、3年間の当研究会に所属する過程で自らが固有に学ぶテーマとして取り組むことにした。しかし、これは甚だ横暴な選択であった。というのは、余りにも存在が大きすぎた。金次郎が為した仕事について書かれた著作がなんと1冊1000ページを超えるもので、全36冊に及ぶ。また、使用される表現が普段接することのない漢文調であり、その上金次郎山に登るための文献も多々あって、それらを選択し、読んでいる内に瞬く間に時間が過ぎてしまった。従って、今回の報告の試論は二次文献から教えて頂いた金次郎の経験の世界のほんの僅かな部分を筆者自身の視点から纏めてみたものになった。

2. 「近代」が模索する行動

(1) 近代という前提の創る行動

近代とは、個人がそれ以前の抑圧の時代を脱して自己主張を始めた世紀である。社会を構成する誰もが“個人の自由”を尊び、それを前提として社会のさまざまな場において個々人の活動が模索され、それぞれ場の関係の在り様がさまざまに展開されてきた。

個人の自由な活動の場において個人行動が自由に謳歌される一方で、やがて生み出すことになった科学技術によって同時に個人の自由が拘束されると言う状況をも生み出すことになった。発達してきた科学技術は自然や社会を秩序付け、それを生み出した精神科学をもその支配下に置くに至った⁽¹⁾。

その趨勢は、19世紀後半頃から自然を対象とする研究活動の場のモノの見方が社会を対象とするモノの見方を超えるようになると、社会のさまざまな活動が“自明視”されるかのように自然に受け流されることになる。すなわち、自然科学的な方法が社会科学的なモノの見方への方法に対して、暗黙の了解でもあるかのように機械的に適用され、その自明視から人間の存在にとって大事な事柄が見過ごされることになる⁽²⁾。

機械的に流れる自明視からでは人間の“自得”を促す経験や心の問題が全く疎外されてしまうというのである。こうした反省が哲学や文化人類学の分野から提示されてくる。ここでは本論との関わりで哲学の提示する問題につ

いて少し触れてみたい。

自然を対象とする科学の場合には法則が成り立つことを自明視しても問題はないと思われる。しかし、社会活動を展開する人間行動に自然と同様な法則が成り立つということは全くないとは言えないまでも自明視することはできないのではないか。確かに原因があれば当然結果が生じるし、目的があればこの面においてもそれを充足する手段が講じられる。この場合、同じ原因だからといって同じ結果が生じるということにはならないし、同じ目的だからといって同じ手段が講じられるということもありえない。それを端的にいえる、決定的な要因は社会環境が刻々と変化しているからである。

従来物事を説明する方法として、一般的に原因—結果、目的—手段の関係が用いられてきている。確かに因果関係に事実を当て嵌めたり、目的—手段の関係が入念に考えられて用いられたりするものの、そこには常にその背後に前提条件が用意されていた。先に原因有りきであり、目的有りきであった。先に思考の上で原因が前提されていれば当然思考の上での結果が用意されているものであろう。そうした思考の背後には常に自明視された法則観が入り込んでいる。入念に考えられた目的や手段にはそれを構成する観念が現実の経験に先行していたのである。社会的現実過程においては、それらに先行して構成された目的—手段をそのまま適用することは不可能であると思われるようになってきた。任意に捉えた事実間の原因—結果の関係も動的な世界への適用では蓋然性の領域を抜けず、不明瞭な判断しか得られないことが解っている⁽³⁾。

動的に変化して止まない現実の社会過程に対して、世界に流布した“偉大な観念”を前提にして構成された世界観によってその現実を説明することが一般的に行われてきた。その絶対的な世界観に基づく説明に上記で述べた原因と結果、目的と手段の関係が遺憾なく利用されていたのである。社会的現実過程は個人的にも組織的にも様々な行動が複雑に織りなされ、そこに現象する問題に対して、その問題を純粹に素直に在るがままに観察するのではなく、偉大な観念を前提にして観察するために、問題の生命を骨抜きにし、平板な事柄として見てしまっていたのではないだろうか。その上に立って如何に事実を並び立てても無機質な事実にはかならず、有機的な関連性を持つ説明は望むべくも無かったのである。

(2)物事を在るままに見ようとする行動

偉大な観念を拠り所に、現実の社会過程がさまざまに説明され、その成果がちゅくちゅくと山積されていく一方で、社会の物事を在るがままに、あらゆる観念を排除した上で観察し、物事の存在そのものを捉えようとする活動がなされていた。その活動の意味するところは自らの“真の経験”を自ら知ることにあつた。如何に優れた観念によって物事を見、解釈しそれを積み重ねてみてもそれは全くの無駄ではないものの、所詮借り物に過ぎない。また、自らの純粋な経験を積み重ねるといふことにもならず、物事が真に“観える”ことにもならない。日々変化する歴史の厳しい現実においては、借りたものは参考にはなつても自らの純粋な経験に接木することもそれを育むことにもならない。従つて歴史の中に息づいてきた人類にとっての普遍的な存在、その意味や価値をも見誤ることにもなりかねない。そこで、以上のような自明視する習慣を一旦停止させて、自らの“目”と“心”で物事を観る運動が展開されてきた⁽⁴⁾。

物事を自らの目と心で観るとはどのようなことであろうか。まず、対象となる物事を観る、その行為に要求される大切な態度がある。その態度とは上記で既に述べてきた偉大な観念や存在を自明視する思考習慣、すなわち、自然に流されていく思考習慣を一旦停止して、物事そのものを素直に見極めてみようといふことである。素直な心で見極めるとは物事から見えてくるそのものを見極める、すなわち知覚し、それを在るものとして表現するといふことである。この物事の捉え方が現象学的還元と言われ、大切なことは人間にとって対象を素直に見極めると、そこに他者と共有できる存在が見えてくるといふことである⁽⁵⁾。

一般的にわれわれの日常で、物事を注視し、それを考えてみようとする時、二通りの見方を採っていることに気づく。自らに拘つて見ていることと自らを突き放して見ていること、すなわち主観的に見たり客観的に見たりする二視点を同時に行っている。大概はそれらの混淆になっているか後者の客観的な視点に押し流され、自らの適切な判断から遠いばかりかそれが人のものか自らのものかも不明瞭に流れてしまつている。そこで日々流されている判断を反省して、個人的にも社会的にも適切な判断や確認を持つことの必要性から現象学的還元という見方が出て来た。曖昧に流れる思い込み的な客観的視点を一旦停止して、素直に、純粋な主観性において物事の見えてくるままのものを捉えてみようといふことである。捉えようとするこの働きは、最初は

漠然と見えていた物事が徐々にその輪郭を明らかにしていくことでもある。純粹な主観性に意識的な知覚作用が働き志向性を促す。この志向性では知覚作用によって徐々に輪郭の明らかになってきた物事が存在として構成されていく⁽⁶⁾。純粹な主観性において構成されていく志向性の過程には純粹自我が働き、積み上げられてきた今までの経験が覚醒され、そこに現に構成される経験が接木されていく⁽⁷⁾。

日常生活において、対象に遭遇したような時、その対象が徐々に存在を明らかにしてくると言う経験は誰でもが持ち合わせている経験ではなかろうか。上記の説明は正にこのことに近い。遭遇の瞬間では対象は視点も定まらず、全体がボンヤリとしか見えない。しかし、少し間を置くとその対象は視点も定まり輪郭も徐々に現し始める。遭遇と還元の違いは物事が見えてくると前者は日々のモノの見方に戻ってしまうが後者では純粹主観が維持されて見えてくるモノを見極める志向性が働くと言うことである。この志向性に働く構成作用ではその人を成り立たせている経験の覚醒とその働きにおいて観ている対象が選択的に輪郭づけられていく。すなわち表象作用である。この表象作用は知覚と言語作用によってある存在として解釈され表象として翻訳される⁽⁸⁾。

眼前の対象への直接的な知覚に基づく志向作用に起こる純粹経験が人をして人たらしめていると言える。この純粹経験によって見極められた対象、すなわち存在は人と共有できるものと述べて置いた。それは現象学的還元が存在の共通了解的(本質的)側面とそれを観る人個人の価値観的側面を峻別確認することが目的化されていたのであり⁽⁹⁾、人をして人たらしめる経験そのものの存在確認でもあったと思われる。

経験が対面行動において内在的に展開される志向性によって育まれていることは事実と思われる。従来この志向性は人間の欲望によって引き起こされ、それに基づいて行動が為されると考えられてきた。正に人間の歴史は人間諸個人の、その集団の欲望の戦いの歴史であったかもしれない。近代が諸個人の自己主張の時代であるという場合、その諸個人の欲望の解放であると言えなくもない。西洋では長く戦われた悲慘な宗教戦争が寛容思想や啓蒙運動を生み出し、個人や集団の行動を規律化する実践哲学が展開され、他者への“支配”を促し、共存存在を自得する哲学の発展を見てきた⁽¹⁰⁾。これも欲望を如何に制御するかと言う欲望との戦いの延長にある。こうして人間の長い欲望との戦いの系譜が人間の行動は欲望によって引き起こされるという仮説が成立したと思われる。行動目的もそれを達成する手段も欲望を満たすためと

考えられ、研究史では古典モデルとして位置づけられている⁽¹¹⁾。

古典モデルでは前もって立てられた目的に対してそれを最適に達成する手段とは何かが追究された。その目的と手段の適合度の高さに、すなわち、取られた手段の最適性に“合理的である”という評価が加えられた。その為に、今日では合理性や合理的と言う言葉は、効率性や能率性あるいは欲望を満たす等の程度を示す表現として使われることが多い⁽¹²⁾。しかし、そのような使われ方ばかりではないようだ。継続的な思考や行動の過程には時として思いもよらない飛躍の齎す珠玉の世界に出会うことがある。この飛躍が発生する思考や行為の過程に働いている存在こそが合理性なのだと言う考えだ⁽¹³⁾。

われわれの身近な会話の中にも飛躍を表現する言葉がある。例えば、“3人寄れば文殊の知恵”とか“試行錯誤の結果”とか、または異質な情報の組み合わせが引き起こす“創発効果”とかには、明らかにある種の動的なプロセスがあり、その過程に飛躍を生み出す合理性の働きを想起することが可能である。この過程は硬直した、拘束された環境ではなく、意志の自由が働き、自由で自発的な志向性の作用の働く世界であると考えられる。というのは、「文殊の知恵」も「試行錯誤」も「創発効果」も、自由で自発的な行為のプロセスの中の実践的作用であるとしか考えられず、またその作用表現に相応しい用語でもある。そこに飛躍を生み出す合理性の働きが想起されるのである。

飛躍を生み出す合理性の働きの方は、自由意志の働く自由で自発的な環境にこそ存在すると理解される。とすれば、この環境を上記で述べた硬直化を免れない古典理論と比較するとまるで逆の理由の側面、すなわち、「欲望に依存しない行為の理由の世界⁽¹⁴⁾」が想起されてくる。行動は欲望に基づいてのみ引き起こされているのではない。むしろ、欲望に基づかない方が自由で創造力豊かな行動が、また、飛躍を介してその発展形が生み出されていることが我々の生活世界には多々存在する。この様に、行動は欲望に基づかないでも引き起こされていることが自由で自発的行為とそこにのみ発生する飛躍との関係を想起すれば容易に理解されよう。そして、われわれの生活世界では古今東西を通じて「行為の理由で欲求に依存しないもの」の存在が多々考えられる。その存在の確認は、さまざまな社会でのさまざまな仕組みづくりやそれが持続的に伝承される姿を想起することで容易に可能である。以降で取り上げる二宮金次郎が経験に経験を重ねた末に行き着いた“徳に報いる心”には、「行為の理由で欲求に依存しない」行動の面が多々見られ、伝えられてきたと思われる。次に二宮金次郎の活動を一瞥して見たい。

3. 金次郎の丹精を込めた生活作り

(1) 「前提条件」を超える自得の経験

人が成長し、隣人と共に手を携えて社会生活を営む過程には、その人固有の経験が蓄積されていく。その経験は、現前する社会を生きた現実として捉え、その生に自らの生を対峙させ、そこに生まれてくる存在そしてそれを意図的に紡ぎながらそれまでの経験に接木して成長を継続する。個人にとって何よりも大切な存在とは、現前する身近な社会の営みであり、その営みを、その人自らの視覚において観察し、そこに捉えられた実在の意味を自らの経験において問い、問題の所在と方向性を明らかにすることが意味のある学びをもつ生き方ではないだろうか。

現前する社会、自らが住む町場の書店には情報が乱舞している。その姿は情報が情報を生み出し元の情報となった出来事の内容から大きく逸れているものさえ感じられる。中には貴重な歴史の経験を冒瀆し兼ねない、情報とは言えない活字の氾濫とも見える。現前する出来事はまず自らの目で確認し、自らの心で吟味する習慣が必須の行動なのだとその乱舞する情報が訴えているようにも見えてくる。

戦前戦後の学びの世界には常に「前提条件」が設けられていた。それは近代への遅れの意識が齎した「お手本」のような存在である。そのお手本を正確に理解しない限り学びの次の段階には進めないという方式である。お手本を理解した上でそれに準拠して現実の社会が生み出している「矛盾」を考える。その準拠枠は矛盾の規定までも提示する。その枠からは遅れているとか時間の経過と共に解消できる等と提示する。歴史と共に古い行動様式だから革命が必要であるとか既に成熟しているから革命は必要でないとか、生きて動態する現実の実在する社会はさまざまに提示されてくる準拠枠に覆われてその在りのままの姿が捉えられないでいたのではなかろうか。

理論的に構成した前提条件の上で生きて動態する現実の実在を捉えるという考え方を間違えだと言うのではない。社会を理論的に捉える考え方は近代の一つの特徴であったとテイラーが述べている⁽¹⁵⁾。社会と理論との関係で理論の果たす役割は複雑な社会を見渡すための地図なのだとやっている。そのことに間違いはないと思われる。しかし、その地図が当の現実の実在から製作されたものでなかったとすれば、その地図は全く利用に堪えないのでは

ないだろうか。例えば戦後間もない時期に、今も機能している町内会の存続を否定する議論があった。これ等は現実の事実を踏まえた地図なのか否かが論じられたように思われた。これから考えようとする二宮金次郎（以下金次郎と表記）の評価についても事実と理論の錯綜が生み出す問題に覆われていて、正しい金次郎像を見えにくくしてきたことが論じられている⁽¹⁶⁾。

金次郎の直弟子、富田高慶の書いた『報徳記』を読むと、金次郎が現前に展開される自然と人為の営みから見えてくる存在に対して、観察と自らの経験に基づく思考を如何に大切にしながら随所に示されている。思考を重ねながら解けない存在について多くの儒教や仏教の経典について学んだと言われている。金次郎の生き方は、現前の存在に対して注意深く観察を重ね、それを積み重ねてそこに問題の所在を突き止める生活姿勢であったようだ。

本試論では、様々な文献が伝える金次郎像から学び、今日の社会に在って学ぶ価値のある彼の自得したと思われる経験の世界について、「想像を發揮」して捉えてみたい。この想像とは、テイラーから学んだ方法で、次のように説明される。想像とは、「ごく普通の人々が自分を取り巻く社会的環境を想像するしかた」のことであり、「共同で行われるさまざまな慣行を可能にし、広く共有される正統性の感覚を可能にするような共通理解」を成り立たせている誰もが持つ想像力のことである。この志向的に想いを巡らせることを「社会的想像」とテイラーは述べている⁽¹⁷⁾。この方法によって金次郎の行動を理解し、その意味を考えてみようと思うのである。

(2)金次郎の生い立ちから社会への関わり

金次郎の生涯の活動は大きく三期に分けて考察されているようだ。その第一期は天明から文政年間、酒匂川の氾濫で極貧に陥り十代で父母を失い、親戚の食客となるものの二十代で自立し、小田原城下で中間をしながら学問に志し、負債を抱えた家老家の家政改革をする一方、斗榦の改革や藩士の貧窮生活の立て直し策の献策とその実践を行った時期。

第二期は小田原城主大久保忠真に見出され、その藩主から大久保家の親戚、下野桜町宇津氏の荒廃した所領の復興を命じられ、その復興に邁進し、いわゆる「報徳思想」を確立した時期である。桜町の復興の評判が周辺地域に広がり、天明に続く天保年間の大飢饉によって荒廃した諸藩の農村復興にも携わった時期。

第三期は幕臣に登用され、利根川分水路見分目論見御用を行った後、大生

郷村から東郷管内の村々の復興を手掛け、人生最後の3年間を今市で過ごし、日光神領89か村の復興に着手した時期となる⁽¹⁸⁾。ここでは第一期と第二期の前半までの活動の足取りを追い、金次郎がどのような経験を重ねて行ったのかに注視してみたい。

金次郎は幕末の1787年(天明7年)7月23日、小田原藩の足柄上郡栢山村で生まれた。フランス革命の2年前であり、維新が80年後に迫る、幕末の大飢饉の真っ最中であった。当時の栢山村には50軒の家があって、その内13軒が二宮一族であったという。金次郎は祖父銀衛門家の養子に入った万兵衛家の二男利右衛門と、足柄下郡曾我別所村の組頭の娘お好との間に生まれ、2人の弟があった。

祖父の銀衛門は働き者で、金次郎が生まれた頃の二宮家は田畑合わせて2町3反余ほどを所有する自作農家であった。金次郎は幼少の頃、天明の大飢饉に見舞われ、その後に続く度重なる酒匂川の氾濫という自然の猛威を肌身近くに体験して育った⁽¹⁹⁾。父は氾濫によって土砂に埋まってしまった田畑の復興のために体力を磨り減らし病に陥り、金次郎14歳の時に亡くなった。金次郎は母を助け、村人に交じって復興に参加する一方、田畑を耕し、入会地から薪を採り、縄を緋い草鞋を作って売り、生活を支えることになった。金次郎は当時普及した寺子屋には行けず父の手ほどきで字を学んだ。その学び方は小田原市の「尊徳記念館」に残されている、砂を敷き詰めた硯箱のような箱から想像できる。手本は名主に書いて貰い、それを基に父の教えを受けた⁽²⁰⁾。手ほどきする父は「栢山の善人」と言われているように誠実で人への思い遣りの深い人であった。

金次郎は16歳の時、赤貧の中で母を亡くし、兄弟3人だけが残された。金次郎は叔父の万兵衛に養われ、弟2人は母の実家に預けられた。叔父の万兵衛は金次郎を一人前の百姓に育てようとした。その厳しい指導を受け止めながら学ぶことも忘れなかった。万兵衛家の仕事の合間には自らに遣された7反5畝余りの土砂で覆われた田を開墾してもいた。その田圃に、近所の人が捨てた苗を拾い植えてみるがあった。すると収穫期には一俵もの物が得られた。この体験が「小を積んで大と為す」という勤労の真理に目覚めさせることになった。たとえ小さな行為でもそれを積み重ねることによってやがては大きなことが成し遂げられる、という意味の体験であった。この「積小為大」の教えは、金次郎に、開墾に志し、田圃を耕すことで、そのことが家の復興に大いなる希望を持たせることになった。金次郎は初めて収穫したこの一俵を無駄にせず人に貸し、更に荒地の開墾に精力的に取り組んでいくの

である⁽²¹⁾。

18歳の時に、万兵衛家を暇乞いした金次郎は名主の家に奉公に入る。手間賃を稼ぎながら、休日には畝下(免税)期間にある土砂で埋まった荒地の開墾に日々真剣に取り組み田地を増やしていった。開墾によって整地された田圃は人に耕作を願い、小作料を頂くのだった。そうして増やした財は浪費せず儉約し、それをまた人に貸付けなどして貯え、田畑の購入をしていった。

荒地の開墾と稲の栽培という自然の世界に対する人間の為すべき営みを一心に誠実に行う金次郎は、その一方で儒教、仏教、神道の書物の読書に勤しむことを怠らなかった。その読書には自らの体験を持って臨み、自らの行動の意味を捉え返し、その行動を更に実践してその意味を“自得”するという生活を続けたのであった⁽²²⁾。「まことの道というものは、学ばなくても自然に知り、習わないでも自然と覚え、書籍もなく記録もなく師匠もなしで、しかも人々がてんでに会得して忘れない、そういうものこそ、まことの道の本体なのだ。⁽²³⁾」

金次郎の生活は四季と共に変化する農業の中の自然と人間の営みを如何に「一円融合」させるかにあった。自然の営みは放置すれば荒地へと知らぬ間に進展する。人間も放置すれば欲望が独り歩きする。欲望が募れば協働は崩れ、堤の修復は不可能となる。自然と人間の営みへの日々の「気配り」が、学ばないで自然に知り、習わないでおのずから覚える農民としての金次郎が意識的に自得する実践倫理であった⁽²⁴⁾。

金次郎は24歳で自家を普請し、復興させた。この時の田畑の所有は既に1町4反5畝余りであった。生活に余裕の出た金次郎は「山雪」という俳号を持った。自らを取り囲む小さな自然から農事の中の四季の移り行く世界までを視野にいれ詠んでいた。この俳句への関心が後の復興仕法を進める過程での道歌となって多々残されている。こうしたところにも自らが育む確かな観察と情緒の豊かさが感じられる⁽²⁵⁾。

自作と合わせて土地を小作に出していた関係もあって、収穫米を米商と取引することがあり、その売買に地域の農家の米も請負うことがあった。そのことから自然に米相場や金融関係に関心が広がり、村人達との交流も盛んで、仲間と行う“講”も大いに関心の的になっていた。これらの経験は今後に展開される「仕法」の仕事に遺憾なく活かされていくのである。また、見聞も広げていた。富士登山を行い、伊勢神宮への参拝も行き、江戸を見物し、船で大阪に行き、京都、金毘羅、高野山、奈良、伊勢に参拝し、帰りは東海道であったようだ⁽²⁶⁾。想起するに、京都では神社仏閣の参拝のみならず、盛

んであった「心学」への関心を示し、大阪では大塩平八郎の存在を気に掛け、たに違いない、と思われる。

文化8年(1811年)、金次郎は25歳になって小田原城下に住み始める。いわゆる中間となって武家の雑事を行い、給金を頂いて生活するのである。栢山と城下との生活の違いは、日常が自然との関係からさまざまな人々との関係への営みの大きな変化であり、生活上の気遣いの在り様への視野と情報の拡大であり、金次郎の見識は内容と質において広がり高められていったと思われる。中間の雑用からは武士の生活の窮乏の実態が自然に見えてくるし、栢山の小作米の米屋との売買は依然と続けられ、そこからは他の商品流通と共に貨幣経済とそれを営む人々の動向の実態が見えてきたのであった⁽²⁷⁾。

武士は上下とも貧しい生活を強いられ、そこに発生する借財は、苦しむ農民をも巻き込む物流の仕組みから見えてくる商人の利潤追求の激しさ厳しさであった。その現前の情景は正しく商人の君臨する姿であり、また、金次郎の目には身分制に拘る武士の社会認識の遅れと見えていたと思われるし、商人の“分不相応”な欲望の限りない追求に映ったに違いない。こうしたことから貧窮に苦しむ下級武士や農民を救う方法として、金融システムとしての「講」の存在の仕組み改善が強く意識されていたと思われる。

文化9年(1812年)には川島家から家老の服部十郎兵衛家の中間となる。金次郎は、同家の子息の勉学のお供をしながら、家中の奉公人に飯や風呂焚きに使う薪を節約し、夜なべ等で縄を緋いそこに生まれる賃金を積み立てることを教えた。その積立金を資金にして、彼らが互いに助け合う「五常講」を組織してその運営を行っていた⁽²⁸⁾。その一方で、貸付けと米や伐採の権利を取得して取る薪、その売買も拡充し、田畑も広げていた。

金次郎は人間関係の広がりや経済的な手腕が見込まれて、服部家の家政改善を引き受けることになる。その仕事で、金次郎が最初に取り組むのは現前の服部家家政の実態調査である。服部家の禄高は名目1200石でありながら実態は403俵しかなく、その実収にもかかわらず、借金を重ねた放漫生活を送っていた。

生活が奢侈に流れ、千両あまりの借金を抱えていた。元金に利息がかかってそれが倍増する仕組みを関知していない。『報徳記』によると、金次郎は家老の立場の服部に対して藩主への奉公の忠誠とその行動に対する可成り厳しい苦言を述べている。そこで徹底した節約生活として、「食事は飯と汁」「衣類は木綿」「不必要なことを好まない」の三箇条を指示した⁽²⁹⁾。

服部は金次郎からのこの節儉の献策を素直に受けなければならなかった。

この献策内容が“分度”である。「収入を見積り、分に相応した支出を差し引いて、収支がつりあうような予算⁽³⁰⁾」、それに応じた生活枠の徹底であった。しかし、生活直直しの途中、大久保忠真が老中となり、家老服部が江戸詰めとなったため、その二重生活が借財の減少を阻むことになり、その埋め合わせに米相場に手を出して失敗する⁽³¹⁾。

そこで、藩士が借財返済に困窮したその生活実態の観察から、藩士の窮乏の実情を感知する家老吉野図書に対して、低利融資による救済方法を献策して認められ、「八朱金一千両の貸下」を受けた。この内700両は8%の利息を取り、300両は貧窮に喘ぐ下級武士に無利息で貸し与えられた。後者については既に経験済みの「五常講」の仕組みを適用し、1組100人、それを3組作り、その名簿の下に、1人3両以内100日を限度に貸与し、それを連帯責任によって返済・循環させるという方式であった⁽³²⁾。

金次郎は栢山で、「積小為大」を心の励みとして自らの家の復興に向かって、土砂に埋まった田畑の開墾に立向いその再生に尽力し見事に成遂げた。また、中間を始めて以来の家政に関わる多様な人的物的な諸関係とその真摯な経営活動が人々から注目されていた。

金次郎の至誠を貫く活動は、文政元年(1818年)11月酒匂河原において、藩主大久保忠真から領民の13人の「出精奇特人」の内の1人として表彰を受けることになった。表彰状の文句、「その身はもちろん村為にもなり」の“村だめ”が金次郎の社会への開かれた活動心を大いに鼓舞することになったといわれている⁽³³⁾。

表彰とも関連して、文政3年(1820年)忠真から領民のためになる献策があれば言上するように通達された時、金次郎は当時、「小田原藩では、一定の正しい榷がなく、それにつけこんで余分に取り立てられるので人民は苦しんでいた。私の父はこれを憂いとし、常に慨嘆していた。私は父のこの遺志を、寝てもさめても忘れられなかった。⁽³⁴⁾」そのことを思い出し、逸早く斗榷の改善を進言した。年貢米を量る時、しばしば農民との間でトラブルが発生し、その弊害は藩でも問題になっていた。その提案は即受入れられ、金次郎自身が榷作りに携わったのであった。

(3) 桜町での金次郎の経験、思想の確立へ

服部家の家政取直しの活動と藩士の窮乏生活救済のための五常講の献策とその成果が藩主忠真の知るところとなり、藩主は藩財政の困窮状態を改革す

るために金次郎の手腕を用いたいと考えた。しかし、身分制に拘泥する藩士は反対であった。その為に、藩主は、既に何度も藩士を送っても解決できない荒廃状態にある下野の桜町領(栃木県真岡市)の復興に当たらせることにした。

桜町領は大久保家の分家旗本宇津氏の所領で、名目4000石の規模であった。文政年間には、元々瘠せていた土地の上に、洪水や異常気象による飢饉が重なり、年収平均は米962表となり、人口も元禄には450軒余もあったところ、150軒に減少していた⁽³⁵⁾。

金次郎は忠真から桜町復興の下命を受けるかどうかを決定する前に、桜町にある3か村(物井、横田、東沼)の実態調査を行っている。その調査は文政4年から5年にかけて8回に亘って行われ、3か村の農家一軒一軒を丹念に見て回り、その家の家族の状態や人口の数、田畑の収納に関わる耕作地や荒地状態、その家の暮らし向き、家屋や便所や物置場、家畜小屋の状態、田畑の肥瘠・用水排水の水路状態、道や橋の状態を復興の可能性とその方法を考慮しながら現状と宇津家に残る10年以上の資料とを重ね調査していた⁽³⁶⁾。

以上の調査から金次郎は忠真に対して次のように報告している。まず、田畑の取高と人口が往時の3分の1に減少していること。3か村の農地が元々瘠せた土地のために耕作を放棄するか、収穫が少ないために、厳しい取立てに耐え切れずに逃散するか、生活困難者が日雇いに出て耕作意欲を失い、農地を放棄するか博打に染まり、身を持ち崩してしまう。水利や土地の境界からの農民間の争いが絶えず、名主への不信も募り共同体的な人間関係が崩れていると。

更に肝腎なこととして、次のような報告をくわえる。農民が耕作意欲を失い、日雇い稼ぎに走り、身を持ち崩してしまう大きな理由は仁政が行われていないからだということ。地味の肥えた上田を持つ国は年貢が高くても人は自然に集まる。しかし、下野のような地味の瘠せた下国はたとえ年貢が安くても人は集まらない。従って、厚く仁政を行い、民の艱難を取り除き、恩沢を民に傾注して失われた農民間に通う人情を取り戻させること。そして、今まで行っていた金を使った復興は避け、民自らの力で復興への道を開発することが必要だ。日本の農業の開闢は、外国の力を借りず、一人一人の農民が田畑を切り拓いてきたようにすること。すなわち、一年目の収穫物はその半分をその年に消費し、残りの半分を来年の為に譲って取って置く。このように年々半分を次年度に譲って行くとその譲りが蓄積されていく。こうして復興を行っていく、という報告であった⁽³⁷⁾。

以上の仁政と恩沢を施すことによって農民の勤労意欲を高めると共に土地への留まりとかつて逃散した者の帰民を促進し、それによって荒廃地の復興が可能であることを告げた。そして、忠真の下令受諾の条件として、宇津氏への年貢米は、文政4年までの過去10年を平均すると962俵だったことをベースに、復興目標を2000俵に掲げ、文政5年からの10年間は、1005俵と畑方もの等金144両を上限として納付すること。復興(仕法)に掛かる予算として小田原藩から年間米200俵と金50両を頂く。また、この予算執行報告は不要とし、仕法継続中は小田原への帰還はしない等の約定を行った⁽³⁸⁾。

年貢米と畑方の金の上限はいわゆる宇津氏の守るべき“分度”であり、この上限以上の収穫があった場合の剰余分は復興を押し進めて行くための予算に組み入れることが了承された。文政5年(1822年)9月桜町陣屋において仕法を開始した。金次郎には8度に亘る事前調査から見えている事柄があった。虐げられ減少途上にある人口をこれ以上減らさないことであり、移民の積極的な受け入れであり、そのためには、農民の剥き出しとなってしまう欲望を静め、“仁”に基づく徹底した支援による自立農民への人間性復興こそが大切であることこれである。

陣屋に入って金次郎がまず行ったことは、3か村の農家一軒一軒の実情を丹念に観察し、それによって気づくことになる具体策を実践するための“廻村”あった⁽³⁹⁾。その廻村で見えてくる実情に対して、その家、その人が自立して生活が営めることになる支援を施すことである。

一人暮らしの老人、寡婦、病人、子供養育家庭等社会的な弱者への支援が最初に行われた。たとえば、子供を養う困窮家庭には養育米を与えている。3か村とその家々を隈なく廻村した直ぐ後に、全ての農民を陣屋に集めて、各村内で模範となる人物(出精奇特人)を村人自らが選出し、票の多い順から、銀一枚とか鎌二枚等々を賞として与えている⁽⁴⁰⁾。

出精奇特人を村民全員で選出する意味は、各人自らの生活を自ら立て直す意識を呼び戻すことであり、隣人関係の硬直や疎遠の事実を各人見直し、相互の協力で改善に向かわせることでもあった。廻村で金次郎が既に捉えている村内の田畑の荒地の実情やインフラ整備の必要性等々に関して村民の意見を聞き、それへの助言や援助や指導を行うことであった。逸早く設けた褒賞の場所は、村民からの主体性と隣人との協力や互助の精神を生み出す場であり、荒廃農村の疲弊しきった農民自らの“心”と協働の倫理観を取り戻す心田開発の場であった。そのためには農民自らが生活規律の厳しさを生み出し共有することであり厳格な指導も行われたのである⁽⁴¹⁾。

金次郎の廻村は毎日変わりなく、朝4時頃から始まり、一軒一軒を丹念に回り、農民の艱苦や善悪そして耕作の状態を観察し、それに基づいて具体的な、奮励、支援、指導を仁恕の心をもって行い、特に、便所や母屋の屋根の修復、更に、灌漑用水・排水状態や田畑の境界状況の観察・修復、如何なる天候状況であっても、日没を超えてまで行った。善行篤行の出精奇特の者をその場で褒賞を与え、邪悪・怠惰な者に心を傾けて厳しく指導し、生活困難者を救恤し、屋根を葺き、木小屋や灰小屋を与え、用水を通し、冷水を抜き、土地の高低、湿地や乾地に土を入れたり取り除いたりと復興にあらゆる事柄に気を配ったのであった。そして、小田原における五常講の経験から「頼母子講」を組織して、住宅改善、荒地の開墾、借財の償還等に利用させ、農民自らが自分の働きに実感が持てるような方向にも支援の具体策を広げた。

田植えの時期に、東沼村の市左衛門が雨の中で1人一心に働いていた。その姿を夜明け方廻村途上、用排水、道路、田植えの進行等の状況を観察していた金次郎が目撃した。そこで、その場において金次郎は市左衛門を「かねがね耕作出精者」として称賛し、褒美を贈った。この記録は金次郎の日記に記載されている⁽⁴²⁾。

荒地の解消は開墾することであり、それには失われた農村人口を増やすことであった。農家の二男三男を独立させるために、家と補助米や金を与え、耕作地を与えて開墾させた。開墾地には鋤下期間が設けられているので農民は喜びとも励みともなって働いた。他国から養子に入った者に米を貸与し、潰れ家を相続した者に住居料を与えた。他国からの入百姓を迎え入れることが積極的に行われた。越後から来た寸平とその家族に奇特の至りで家作料の為として5両とお酒を与えている⁽⁴³⁾。

金次郎の桜町復興への登用と彼の執る政策に快く思わない者も居た。小田原藩の藩士の中には金次郎の存在を拒む者が多かったし、農民の中には金次郎が執る自立農民育成策と入百姓の積極的受入れ策に反対する者が多々いたことは容易に想像できる。それは、荒廃農村で疲弊した農民を最初に撫育するのが金次郎の仕事であっても、その一方で村内の人口増加策も同時に進めなくてはならず、疲れ切った農民にとって旧来の土地を耕作しながら入百姓の優遇される姿に我慢できなかつた者も居たに違いない。こうした農民の多くは目先の利害に拘りがちで、欲望に流されてしまう。新旧の対立で、旧の不満農民は何らかの形で陣屋の詰役と気脈を通じて口論が拡大し、新入百姓は与えられた土地に居ることが苦痛になり、脱走がしばしば生じた。金次郎はこの脱走者を連れ戻そうと近郷を搜索することもあったようだ⁽⁴⁴⁾。

金次郎が復興の指揮権を与えられていても、身分的に上位にある小田原藩からの詰役が農民の利害に結びつき、金次郎が苦慮した解決策を蔑ろにすることが多々生じ、進退伺いすら持ち上がる程であった。桜町の農民が他領の村の地所を所有していたので、金次郎はこれを認めていた。しかし、詰役は他村の地所はその村に買い取って貰うべきだと主張したことで対立が生じる。開墾地に移住し、真摯な勤労に勤しむ寸平が村内の評価も高く、名主役格に選ばれた。先輩格である岸右衛門はそれを不満とし抗争になる。一方、名主平左衛門が土地の仕切りの不明確な場所の木を切ったかどで、その土地の所有者と思っている岸右衛門と衝突する。この岸右衛門は金次郎にとって難物中の難物であった。しかし、金次郎の至誠の滲む行動を理解した後は、仕法の協力者として活躍した⁽⁴⁵⁾。他の問題は物井村の3人の者が所要で隣村の石橋を通行していた折、西物井村の普段から酒癖の悪い平左衛門と喧嘩口論となった。3人はその場を離れ村に帰った所、平左衛門から賭博をしていたと詰役に訴えられた。3人は事実無根を主張したが手鎖村預けにされた。その後、この詰役が御役御免となった。金次郎にとっては、この事件の真意が明確にならず、3人からは農業に出精するという赦免の嘆願がだされ、必ず出精することを命じて赦免にした⁽⁴⁶⁾。

これら一連の策謀された事件が藩主の知るところとなる。が、元々金次郎の復興についての構想に信頼を置いている藩主は金次郎に事の仔細を確認するだけであった。

金次郎は藩主に呼び出され、出府した後、成田の信勝寺で断食祈願を行う。この祈願によって、これまで金次郎が積み重ねてきた経験の根元的な見直しによって次に述べる報徳思想の核心に近づいたと言われている。

(4) 金次郎の経験が伝える事柄

① 勤労・分度・推譲

金次郎ほど経験に経験を重ね、常にそれを基にして現前に展開される問題と真摯に向き合い格闘しながら自らの生活を切り拓いて生きた人は稀だろう、と想起して間違えないと思われる。そのように考えられる金次郎の経験は既に幼少のころから始まっている。何度も体験した酒匂川の氾濫。家の床下を川のように流れる水の恐怖。繰り返される土砂に埋まる田畑の悲惨さ。修

復しては崩れる堤の決壊の理不尽さ。それでも負けずに立ち上がり、土砂を取り除き、堤を修復する金次郎自らも参加する村人の協働の姿。これら眼前に繰り広げられた自然と人間との繰り返される営みへの気付きが齎す経験が金次郎という人間を創り上げたと思われる。

人の力を寄せ付けない猛威を自然は秘めている。その一方で、土砂を免れた田圃の空き地に、僅かに捨ててあった苗を拾って植え、丹精を込めて育ててみると、そこには一俵もの稔の収穫を得させる自然の姿があった。金次郎の観察には季節と共にやってくる自然の猛威と同じ自然の平常時での穏やかな流れとその恵みの深さが観えていた。丹精を込めた捨て苗の生育の姿には様々な現象を発見し感じ取ったに違いない。

稲は6月に植え、10月に収穫する。その間の丹精には、稲の生育に対して田圃の水を調節したり、肥料を投与したり、雑草を採ったりと育つ稲を見つめ続けたであろうし、収穫の時期には捨て苗の本数に対して収穫の多さに驚嘆したのである。この収穫の経験が周知のように、「積小為大」という経験の自得であった。小さな事柄(行動)でもそれを丹精込めて積み上げて行くと、それはやがて大きな(価値ある)ものに為すことができる、そうした経験であった。

この積小為大の存在は金次郎のその後の思想形成の源泉に成っていると思われる。また、この教えは、今日のわれわれの生活の隅々にも存在し、その「気付き」の必要性が度々問われている。

積小為大の自得には勤労の大切さが同時に自得されている。勤労は金次郎の行動とその思想の核と思われる。金次郎は毎日、桜町の3村を農民がまだ目覚めぬ朝早い時刻から夕方遅くまで廻村し、一軒一軒を隈なく回り、言葉を掛け観察し、支援の必要な者には手を差し伸べ、指導が必要な者にはこれを慈愛をもって厳しく諭した。廻村によって積み上げられていく行動がやがては荒廃農村で失われていた農民の人間性を呼び覚まし、勤労意欲を甦らせ自活への道を促すことになる。金次郎が荒廃農民に対して、最も欲したと思われることは、農民が自らの力で生活が可能となり、自力の生活で家族が養われ、人の存在が認知され、自活できる農民の間に協働が生まれることであった⁽⁴⁷⁾。農民の自立への生活とその安定を得させるのが唯一“勤労”であったことが自得されていたと想起される。

金次郎が藩主大久保忠真から示唆された「以德報徳」は、金次郎の思想表現「報徳」の根源である。その根幹に位置づけられているのが勤労ではないか。農業は大地に働きかけ、大地に埋もれている潜在能力すなわち“徳”を引き

出すのが丹精な勤労にあったからである。勤労は大地だけではなく、家族に働きかけ、隣人にも働きかけ、その間の関係の徳を掘り出す、すなわち人に報いるということでもある。働きかける大地から徳が引き出せるように、秩序を維持する役割からも徳が引き出され、商いや鍛冶からも徳が引き出され、それに報いるのが人としての勤労にあると金次郎は言う。その反面で、天地人の間に在ってどの様な職業においても丹精の欠落した勤労からは徳は生じない、と厳しく社会の在り様を観ていたと思われる⁽⁴⁸⁾。

積小為大の経験が勤労の意味を自得させ、小を積んで大と為すには、そこには当然節儉が必要であった。その年に収穫したものを全てその年に消費してしまったのでは次の年が成り立たない。収穫したものの半分とは言わないまでも、その人の分相応と言われる程度に消費を止め、そこに節約した余剰を次の年に譲る必要があると金次郎は考えている。生活を維持しながらも分相応の消費を心掛け、そこに生じる余剰を積み立てることで失われた一家の再興を成し遂げたのであった。ここに生まれてきた思想が“分度”という考え方である。

分相応とは自然の天分であるという。その天分によって消費の枠を定めることを分度と言った。「末世の今日、人々はみな、ぜいたくを追い求めて、分度を守るものはさわめて少ないが、分度を守らないかぎり、大きな国を領有してもやはり不足を生ずる」⁽⁴⁹⁾。身分の上下を超えて、分度を定めない限り、一家も一村も一国も生活は立ちいかないことを見つめている。金次郎にとって、富国安民はただ分度をもつか否かに尽きると考えたのであった。金次郎が家老の服部家に奉公して家政改善を始めた時、身分を超えて当主を戒めたことは分度を定めない、慎みのない贅沢に流れた生活に対してであった。借財を重ね、商人に家政を牛耳られ奉公を蔑ろにした実態の指摘であった。服部家では分度を定めた生活を始めることによってその生活は好転し、借財の締め付けから解放されたのであった。

生活に分度を定めることで、勤労そのものに意味がもたらされる。すなわち分度を持つことによって余剰が生まれ、生活に縛られないその余剰は次年度の生活に譲られるか親戚や隣人に譲ることができる。余剰を隣人に譲るということは、今日的に言えば社会貢献と言うことになる。自らの生活に分度を設け、そこに生まれてくる余剰を人に譲ることを金次郎は“推譲”という。「譲りは人道だ。今日の物を明日に譲り、今年のを来年に譲る道を勤めない者は人にして人ではない。十銭取って十銭使い、二十銭取って二十銭使い、宵越しの金を持たないというのは鳥獣の道で、人道ではない。鳥獣には今日

の物を明日に譲り、今年のを来年に譲るという道はない。人はそうではない。今日の物を明日に譲り、今年のを来年に譲り、そのうえ子孫に譲り、他人に譲るといふ道がある。⁽⁵⁰⁾」

一粒の米を蒔けば何十粒もとれる。その何十粒かを人に譲れば、その人は何百倍もの米がとれる。それと同じように人が一時隣人に力を譲ることで、そこに生まれる力は計り知れない大きな力になることは容易に理解できる。どんなに小さな行為でもそれを隣人に押し譲ることがあれば、隣人は必ず何らかの反応を返すことになり、その小さな行為がいずれは数倍の隣人の行為を生み出すことになる。現状の欲望に流され、欲しいままに取れるだけ取って生きていたのでは人の道は立たない⁽⁵¹⁾。人は自らを慎み、少しずつでも人に譲ることがあって、初めて社会が成り立っている。金次郎は貧しかった幼少の頃からの生活経験を積み上げていく過程で、人間としての在り方の普遍的な姿を捉えていたのであった。

金次郎は600にも及ぶ荒廃した農村の復興に携わったと伝えられる。そこで執られた復興への具体的な方法を“報徳仕法”と呼ぶ。その根幹となっていたのが経験の上に経験を積んで自得することになった勤労・分度・推譲という思想であり、その下に生きる農民は既に身分制を超越していたと思われる。それを裏付ける金次郎が自然と人間の世界との関わりについて、幕末において他には到達することの無かった斬新な理解の世界を次に見ておきたい。

②天道と人道と

金次郎は叔父の万兵衛に養われてその家の家業を手伝う傍ら暇を見つけては自家の土砂で埋もれた田圃の開墾を行っていた。そうしたある時、害を免れた空き地に、他家で捨てた捨て苗を拾い植え、丹精を込めて育ててみると、一俵もの籾の収穫があった。そこに自然と人間との営みそのものへの“気付き”を含蓄する積小為大の思想を齎す“勤労”の意味を知ることになった。金次郎の自然や社会の営みへの理解は、幼少の頃から眼前に展開される自然が秘める猛威や村人から善人と称された父からの薫陶とその村人との貧しさの中での関わり合いが直接経験の積み上げとして始まっている。しかし、意識的で志向性的である観察の“目”の働きの始まりはこの積小為大の自得からであろうと思われる。「まことの道というものは、学ばないでも自然に知り、習わないでも自然と覚え、・・・日々繰り返しかえし繰り返しかえして示される天地

の経文に、まことの道は明らかなのだ。・・・よくよく目を開いて、天地の経文を拝見して、これを誠にする道をたずねるべきだ。⁽⁵²⁾」と言う経験の自得である。

僅かな捨て苗を植えて一俵もの収穫を得るには余程の丹精があり、叔父万兵衛の健気な甥への指導もあったに違いない。稲の成長時には水も肥料も必要であり、何時の間にか雑草も生え、それを取り除く等々と四季の移り変わりとともに掛かる手間と観察によって経験が重ねられていく。この一俵の経験から金次郎はもくもくと荒地を耕し、田圃の再生を続け、人の手に渡ってしまった田畑を買戻し、夜は遅くまで勉強に勤しんだ。一心に農業に打ち込む金次郎に見えてくる自然の姿は四季や昼夜そして万物生滅の変わらぬ循環であり、この自然の循環を放置すれば、稲には雑草が混じり、「築いた堤は時々刻々と崩れる。掘った堀は日々夜々に埋まり、ふいた屋根は日々夜々に腐る。⁽⁵³⁾」これを天道の姿と観た。天道は稲も雑草も種が土に入れば等しく生育させる。形あるものはやがては崩れてしまう。「天道にまかせておけば田畑はみんな荒地となって、開びやくの昔に帰ってしまう。⁽⁵⁴⁾」従って、稲を育てるためには雑草を抜き取り、崩れて行く堤は常に修復し、堀を維持するためには堀浚いに気遣いする。この勤労を人道と考えたのである。

丹精を込めた勤労によって収穫した稲の中に観えてきた経験には明らかに異なる2つの側面の力否3つの側面の力が介在していると金次郎は観ていた。その3つの側面とは天地と人の力であり、それらの力の融合が稲の収穫を齎したのだということを観て取ったのであった。勤労の眼前に展開する天地の万物の生成・発展・消滅を司る力と人間の勤労そのものの力、この“天地人3才”の力⁽⁵⁵⁾の融合が経験となって、その経験が齎した稲の収穫時の米一粒一粒の中に埋め込まれている事実を金次郎は自得しているのである。ここに幕末における日本では誰も理解の及ばなかった天地の自然の力と人間、人為の力の異なる世界の存在を明らかに観て取ったのであった。

行動を通して得た経験に対して、更に行動的に思考を巡らせていく。その思考の頂点にあって日々軋轢を前にして、苦悩の中で過ごした桜町での経験が、人道の核心への覚醒に導いた。その経験とは小田原藩から派遣された詰役と農民の癒着による金次郎の仕事への妨害で、自らの進退を自他が問う局面に置かれた苦悩の中での試行錯誤の日々のことである。

当時金次郎の眼前に展開されていた農村の姿は復興が緒に着き始めて安定期に差し掛かる時期であった。安定化に不満を持つ詰役と農民の妨害である。この妨害の事態を眼前にして金次郎の思考が頂点に差し掛かった時、金次郎

に観えてきた事柄があった。それはその事態に対する双方の志向性が「半円の見」すなわち、肉眼で見える事柄しか見えていないということである⁽⁵⁶⁾。金次郎はひたすら仕事を前に進めたいという欲望、妨害者はそれを阻止したいという欲望の双方の半円の見であった。

対象を眼前にして動き出す人間の意識の志向性は“ああしたい、こうしたい”という欲望が先に立つ。見えてきた対象が自らの欲望でしか見ていないので、半円の見と言っている。眼前に物事が見えてきた時、それを見ようとする視覚は選択的に働くとされている。

従って、見て取ったものは選択した部分であって、選択されなかったものが残っていて、全体では無かったのである。金次郎はここに気付いたのであった。人間が見るモノには観えていないモノが必ず残る。そのことに気付いたのである。金次郎は次のように表現している。

「情欲のままにしていれば、人道はたたないのだ。たとえば、漫々たる海上には道がないように見えるけれども、航路を定めてこれによらなければ暗礁にふれることになる。・・・言語も同じことで、思うままに言葉を出せばたちまち争いを生ずる。だからして人道は、欲を押え、情を制して、つとめ努めて成り立つものだ。うまいものを食い、よい着物を着たいのは天性の自然だが、これを矯め忍んで、家産の分内にしたがわせる。・・・安逸を戒め、欲するところの美食美服を押え、分限の内をはぶいて有余を生じ、他人にも譲り将来にも譲らなければならぬ。これを人道というのだ⁽⁵⁷⁾。」と。

“生活”は個人に対して自然の態度で「衣食住」を求める行動を許容する。それが天性の人間の姿である。しかし、この生活は個人のみによって完結するものではない。他者の存在が在って初めて許容された営みなのだ、というその他者の存在への“気付き”の必要性を経験的に自得したのである。それは、対象を志向する欲望によって表象することができた経験はあくまでも選択によって得た「半円の見」の存在なのであって、その経験から漏れてしまって隠れたもう半円の見への気付き、このことを生活の中で常に意識化していることが人道なのだと思得しているのである。

われわれは近代の問題を考えた最後の所で、「欲望に依存しない行為」があることを述べた。行為の過程に合理性が働き飛躍が生成されるという話である。欲望だけでは社会は創造できない。他者の協力を引き出すには、そして、他者との間に飛躍の産物を生み出すためには、経験の隠れた部分をどう意識化するかに懸かっていると思われる。

4. おわりに

「生きると言うことは、“気を遣う”ことだよ」と金次郎は言ったのかも知れない。個人主義を吹聴に吹聴を重ね、拳句の果てに、個人主義ならぬ“孤立主義”ならぬ孤立状態を招いた。その現在の社会に大変必要とされる、生活する上での美德と成って来て、何時の間にか忘れ去られている“気遣い”、その復活を金次郎が今われわれに身を挺して問いかけている、と想起した。気を遣うと言うことで、偽物ではなく、本物を見つけてきた金次郎の経験の世界であった。

気を遣うということは、人に対して遜るということだけではない。むしろ、真剣に対面すると言うことではないだろうか。ハイデガーは共に存在するために気を遣うんだ、と言っている。振る舞いの美德は何も日本人のお家芸でも何でもない。万国に共通したことなのだ。19世紀から20世紀初期にかけ、不安定な社会の中で、気を遣う生き方＝存在論を“共存在”の大事な人間の生きる姿勢として表現していたのである、と想起する。

本試論の前半と後半を通じて、経験の問題を読み解くために大変反省していることがある。前半に関係する文献にもう何度も目を通したいものがあるということ。そして、後者では、金次郎の著作を、そして彼が学んだ文献を、また江戸時代の歴史文献を更に深く真剣に読まなくてはならないということである。本試論を書くことによって優れた二次文献を知ることができた。それにも再度目を通しながら金次郎の著作に向い、その周辺にも目を配り、困難な生活世界との対話を避けることなく、この試論を書き直してみたいと思う。

【注記】

- (1) Husserl,E.他『30年代の危機と哲学』清水多吉・手川誠士郎訳、平凡社、1999年 158-160ページ
- (2) 本田元『現象学』岩波書店、1997年 38-42ページ
- (3) Russell,B.『西洋哲学史3』市井三郎訳、みすず書房、2006年 651-666ページ
- (4) Husserl,E.『デカルト的視察』浜渦辰二訳、岩波書店、2001年 59-76ページ
- (5) 武田青嗣『現象学は＜思考の原理＞である』筑摩書房、2004年

25-88ページ

- (6) Husserl,E.『デカルト的省察』浜渦辰二訳、岩波書店、2001年
59-104ページ
- (7) Husserl,E.『同上』61-62ページ
- (8) 鷺田清一『現象学の視線—分散する理性』講談社、1999年 90-138ページ
- (9) 武田青嗣『現象学は<思考の原理>である』筑摩書房、2001年
70-88ページ
- (10) 「生きることは、それが関わる場所を捉えれば、気を遣うことと解釈することができる」のであり、「存在論的な世界は、“気を遣う”という私たちの態度によって構成されている」。後述する金次郎の現前に対する在り方はこの姿勢に貫かれていたと想起される。北川東子『ハイデガー—存在の謎について考える—』NHK出版、2002年 76ページ
- (11) Searle,J.R.『行為と合理性』塩野直之訳、勁草書房、2008年 5-34ページ
- (12) Taylor,C.『<ほんもの>という倫理—近代とその不安—』田中智彦訳、産業図書、2004年 6ページ
- (13) Searle,J.R.『行為と合理性』塩野直之訳、勁草書房、2008年
69-78ページ
- (14) この文章の意味が以下のページ置いて詳細に説明されている。Searle,J.
R.『行為と合理性』塩野直之訳、勁草書房、2008年 183-233ページ
- (15) Taylor,C.『近代—想像された社会の系譜』上野成利訳、岩波書店、
2011年 39-41ページ
- (16) 以下の図書から公平な金次郎の捉え方を学んだ。大藤修『近世の村と
生活文化—村落から生まれた知恵と報徳仕法—』吉川弘文館、2001年
36-69ページ
- (17) Taylor,C.『近代—想像された社会の系譜』上野成利訳、岩波書店、
2011年 31-32ページ
- (18) 以下の図書は伝記として理解しやすし、この試論の基本的な知識はこの
の図書と『報徳記』によっている。二宮康裕『二宮金次郎正伝』モラロ
ジー研究所、2010年
- (19) 二宮康裕『同上』37-38ページ
- (20) 大藤修「二宮金次郎と報徳仕法」『小山町史』（近世通史編）886ページ
- (21) 二宮康裕『二宮金次郎正伝』モラロジー研究所、2010年 39ページ

- (22) 「彼(金次郎)は儒教・仏教・神道関係の書物も多く読んでいるが、その際、日常の生活体験に照らし合わせて解釈し、実行に移してその理の正当性を証明しえた教えのみを摂取するという姿勢をとっていた。この“自得”の精神、そして理論と実践の一致一実はこれこそが、金次郎のみならず、荒廃した農村にあって家と村の復興に奮闘した多くの農民たちの思想形成と実践活動を支えていた原理であったのである。」大藤修「二宮金次郎と報徳仕法」『小山町史』(近世通史編)888-889ページ
- (23) 福住正兄『訳注二宮翁夜話(上)』佐々井典比古訳注、一円融合会、2010年 1ページ
- (24) 既に、注(10)で説明したが、われわれの関わる世界は万物であり、それらは「気を遣うという私たちの側の態度に規定された世界であり、さまざまな意味を持ち、さまざまな意味の担い手という姿をした世界」であるため、その世界が鋭く自分の方に向かってくる感覚で捉えるということである。北川東子『ハイデガー — 存在の謎について考える —』NHK出版、2002年 76-77ページ
- (25) 二宮康裕『二宮金次郎正伝』モラロジー研究所、2010年 64-65ページ
- (26) 二宮康裕『同上』68-69ページ
- (27) 二宮康裕『同上』72ページ
- (28) 佐々井信太郎『二宮尊徳傳』日本評論社、1935年 42-45ページ
- (29) 児玉幸多編「報徳記」『二宮尊徳』(日本の名著26)中央公論社、1970年 65-69ページ
- (30) 児玉幸多編『同上』68ページ
- (31) 二宮康裕『二宮金次郎正伝』モラロジー研究所、2010年 80ページ
- (32) 二宮康裕『同上』81-83ページ
- (33) 松尾公就「報徳仕法と小田原藩の村むら」『小田原市史』(通史編近世)765-766ページ
- (34) 齋藤高行『二宮先生語録(下)・報徳外記』佐々井典比古訳注、一円融合会、2009年 5-6ページ
- (35) 児玉幸多編『同上』71ページ
- (36) 二宮康裕『同上』92-94ページ
- (37) 児玉幸多編『同上』72-74ページ 佐々井信太郎『二宮尊徳傳』日本評論社、1935年 84-91ページ
- (38) 二宮康裕『同上』93-95ページ
- (39) 金次郎が荒廃農村の復興に当たって、最初に手掛けることが現地の実

- 態調査であった。たとえば、日光89か村の復興に当たっても、既に老体しかも病身であるにもかかわらず、金次郎は、役人の勧める駕籠も辞退して自らの足で廻村を行った。この廻村こそが眼前する現状との真剣な対話であり、正に原点に戻ってその実情を捉えることであった。ここに金次郎の存在論的な態度が伺える。『いまいち市史』（通史編・別編Ⅰ）1980年 101ページ
- (40) 二宮康裕『同上』96-102ページ
- (41) 深谷克己「報徳仕法」『栃木県史』通史編5近世2 1984年 912-915ページ
- (42) 佐々井信太郎『二宮尊徳傳』日本評論社、1935年 100-102ページ
- (43) 深谷克己「報徳仕法」『栃木県史』通史編5近世2 1984年 902-905ページ
- (44) 佐々井信太郎『同上』103-105ページ 二宮康裕『同上』103-106ページ
- (45) 佐々井信太郎『二宮尊徳の体験と思想』一円融合会 1963年 17-18ページ
- (46) 佐々井信太郎『二宮尊徳傳』日本評論社、1935年 116ページ
- (47) 金次郎の教えは公共性の意識と地域ネット形成の醸成を促す影響も指摘されている。大藤修『近世の村と生活文化 — 村落から生まれた知恵と報徳伏法 —』吉川弘文館、2001年 213, 247ページ
- (48) 佐々井信太郎『同上』134-139ページ
- (49) 福住正兄『訳注二宮翁夜話あ(上)』佐々井典比古訳注、一円融合会、2010年 7-8ページ
- (50) 福住正兄『同上』182ページ
- (51) 福住正兄『同上』184-186ページ
- (52) 福住正兄『同上』1ページ
- (53) 福住正兄『同上』45ページ
- (54) 福住正兄『同上』46ページ
- (55) 二宮金次郎の思想は主著『三才報徳金毛録』に集約されている。ここでいう三才は、天・地・人の三つで、力と言ったのは“徳”のはたらきである。以下の図書の解説による。佐々井信太郎『二宮尊徳の体験と思想』一円融合会 1963年 169-266ページ
- (56) 下程勇吉『二宮尊徳の人間学的研究』広池学園事業部、1976年 448-449ページ

(57) 福住正兄 『同上』 47-48ページ

なお、上記の注記の文献を含め、金次郎に関わる多くの文献について、その探索にご協力いただいた平塚図書館のレファレンサーに心より感謝申し上げます。